

エコップ・モンスター（図画工作科）

津市立南が丘小学校 教諭 三輪辰男

I はじめに

造形活動はイメージやメッセージを形や色等によって可視化して伝え合う営み、すなわちコミュニケーションである。この特性を活かし、楽しくかつ効果的なエネルギー・環境教育を展開できないか—この問題意識に基づき平成 19 年度から様々な試みを続けてきた¹⁾。

その一環である本実践のテーマはごみ問題。対象学年は 5 年生である。

II 題材の概要と指導計画

■ 題材の概要

身近な環境問題にごみ問題がある。使い捨て型商品の普及、耐久消費財の頻繁な買い換え、オフィスの OA 化に伴う紙ごみの増加等によって大量のごみが発生している。

環境省によれば、日本全体で 1 日に発生するごみの総排出量は平成 27 年度で 4,398 万 t。国民 1 人あたり毎日 939g を排出していることになる。ピーク時と比べれば微減傾向にはある。しかし、それでも尚、大量のごみが排出され続けている。その処理を巡っては、焼却に伴い排出される大量の CO₂、人体に

有害なダイオキシンの発生、埋め立てによる環境への負荷、最終処分場の残余容量の減少等が懸念されている。また、ごみ問題に対する国民の関心が年々低下傾向にあることも問題視されている²⁾。

本題材は上の状況を受け、児童のごみ問題への関心と減量への意識喚起をねらいとして設定するものである。

具体的には、捨てられた「紙コップの思い」から発想を広げ、紙コップと円形シールの加工を工夫してモンスターを表す活動である。

■ 指導計画（全 3 時間）

第 1 次では、日本におけるごみ問題の現状を画像や具体的なデータから知り、本題材の活動について理解する。

第 2 次では、「紙コップの思い」から発想を広げ、モンスターを表す。使用できる紙コップはモンスター 1 体につき 1 個。のりやテープは使わない。円形シール（赤・青・緑・黄・白の 5 色。各色直径 15mm・8mm・5mm の 3 種類）を使

¹⁾ これまでの取り組みは、平成 19～22、24～26 年度、28 年度の「エネルギー環境教育成果報告書」（三重大学・中部電力）を参照いただきたい。

²⁾ 「平成 29 年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書」による。ピーク時、平成 12 年度の総排出量は 5,483 万 t、国民 1 人当たりの排出量は 1,185g であった。平成 27 年度における最終処分場の残余年数は、20.4 年と推計される。「ごみ問題に（非常に・ある程度）関心があると回答した国民は、平成 19 年度 85.9%、23 年度 81.2%、28 年度 66.3% と低下傾向にある。

ってもよい。本題材のねらいに即し、ごみは出さない。以上の4点を製作の条件とする。

第3次では、ワークシートを用いた鑑賞活動を行う。最後に、質問項目への回答と感想の記入により、学習を繰り返す。

■参考にした実践

本題材を構想するに当たり、富川淳氏（琉球大学教育学部附属小学校）の実践「戦え紙コップモンスター」（対象6年生）を参考にした（『作りたくてたまらない』授業づくり）、『教育研究』初等教育研究会、2014年4月号、p.55）。

実践の概要が分かる部分を以下に引用する（／は原文における改行部を指す）。

授業のねらいは、紙コップを自分の工夫を生かした形に変身させることができることです。／紙コップの形を変えるだけという内容。一見高学年には簡単な内容に見えますが、材料を絞ることで学年の発達段階に合わせていくようにします。／導入では興味を引き出すために、ストーリーを設定します。教師が紙コップ片手に授業スタート。／「地球に宇宙人が攻めてきました。地球の科学者はそれに対抗するため、人間の代わりに戦ってくれるモンスターを生み出しました。そのモンスターはそれぞれいろんな特徴を持っています…」という、みんなはもう話の世界に入っていきます。…〔略〕…／試行錯誤させるための材料の縛りとして、1つの作品につき使える紙

コップは1つだけ。のりやテープは使わない。モンスターの形にするため、目となるシールだけは用意してあることを告げると、「えっ、1つだけしか使えないの」という反応。のりやテープも使えないことから、どんな風に組み合わせようか、試行錯誤させることが目的です。

以上から明らかのように、富川氏の実践は環境教育をねらいとしたものではない。そのため、本題材で設定した「ごみを出さない」という条件は見られない。

Ⅲ 授業の実際

■第1次：日本におけるごみ問題の現状と本題材の活動について知る

授業は、共同机がある図工室で行った。複数名（4、5名）で共同机を囲みながら活動を進めることで、刺激し合いながら活動が展開されると期待したからである。加えて、図工室には製作途上の作品を保管できる作品棚も設置されており、本題材の学習環境に最適と考えたからである。

授業の導入は、児童との以下のようなやりとりから始めた。

黙って紙袋から1個の紙コップを取り出す。紙コップであることを確認し、「使ったことがある人？」と尋ねる。全員挙手。どんなことに使ったのかを数名に尋ねる。「お茶を飲みました。」「ジュースを飲みました。」等…。使った後、どうしたかを数名に尋ねる。全員「捨てた」と答える。「自分も捨てたという人？」と全体に尋ねる。全員挙手。

「そうですか。捨てましたか。(間)では、こんな設定で学習をします。」と言い、次の紙を黒板に貼る。

【設定】

ごみとして捨てられた紙コップがモンスターとなって現われた。

「えーっ！」という声上がる。静かになったところで、「なぜ、モンスターとなって現われたのでしょうか。」と尋ねる。「捨てられて悲しかったから。」「怒っているから。」「捨てた人を恨んで。」「もっと使ってほしいと思って。」等が出る。

出された意見を全て認め、「実は今、大変なことになっているんです。」と言って、1枚の写真を黒板に貼る。大量のごみで溢れ返る最終処分場の写真(『新版 温暖化と生き物の生態が分かる ちきゅう大図鑑』世界文化社、2007年、p.7)である。

「うわ〜、ゴミだらけ!」「すご〜!」等の声上がる。続いて、「Ⅱ 題材の概要と指導計画」で述べた日本のゴミ問題の現状についてデータを示しながら説明する。教室が静まり返る。

「今日と来週の2回、こんな学習をします。」と言い、題材名とめあてを書いた紙を貼り、音読させる。

【めあて】

「紙コップの思い」が見る人に伝えるように、表現を工夫しよう。

「但し、次の条件があります。」と言って、次の条件を書いた紙を貼り、音読させる。

【条件】

① 紙コップ1個で1体を作る。

② のりやテープを使わない。

③ 円形シールを使ってもよい。

④ ごみを出さない。

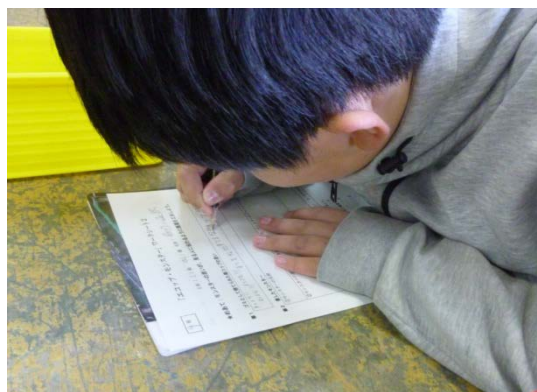
音読後、各条件について説明を加える。4つ目のところで、「だけど、こうなる場合もあるよね。」と言って、紙コップに無造作にハサミを入れる。三角形の紙片が切り離されて机の上に落ちる。

「あっ、ごみが出た!」と声上がる。紙片を拾って見せ、「これだと4つ目の条件が守れませんね。どうしたらいいですか。」と問う。しばらくして数名が挙手。「切って挟みます。」「両方に切り込みを入れ、差し込んだらいいと思います。」等が出る。「なるほど、こういうことですか。」と言って、紙コップと紙片にハサミで切り込みを入れ、繋いで見せる。「おーっ!」という感嘆の声が漏れる。アイデアを出した児童を大いに褒める。最後に、児童から出された質問に答える。

ここまでで約15分である。

■ 第2次：紙コップのモンスターを工夫して作る

表現活動に先立ち、ごみとして捨てられた「紙コップの思い」を想像してワークシートに記入する。



「紙コップの思い」を記入する

この「紙コップの思い」が表現の主題となる。記入に際しては「怒り」「恨み」等のような抽象的な語句ではなく、セリフの型式で記入させる。紙コップを擬人化することで、児童に表現するモンスターをより具体的にイメージさせるためである。

記入を終えた児童から、表現活動が始める。活動の進め方は実に多様である。手に取った紙コップをすぐに切り始める児童。机の上に置いてじっと眺める児童。手に持って様々な向きから観察する児童。円形シールを色別・サイズ別に並べ、どれがイメージに合うか思考する児童…。

児童は形や色による「紙コップの思い」の実現をめざし、各自の活動を進めていく。活動中、指導者は机間を巡り、助言や称賛の声を掛け、児童からの質問に答える。教室のあちこちで自然に児童同士の対話も生じる。

1 時間目の終了直前、間もなく 5 分間の業間休みであることを告げる。しかし、活動に夢中になって誰も手を止めず、席を立とうとしない。数回声を掛けて、ようやく数名が休憩をとる。

表現活動の様子を以下に示す。



三角形の紙片を差し込み、怒りを表す



頭部に作った突起を折り曲げる



シールを半円に切り、怒りの目を表す



互いの表現について対話する

1 体目を完成させた児童には、形や色について短くコメントし、2 体目に取り組ませる。

2 体目の製作途中で 2 時間目の終了 10 分前となった。作品に記名させ、作品棚の所定の場所に置かせる。

翌週、表現活動の続きを行う。活動時間は 20 分間。終了時刻になったところで、ワークシートに自分が最も気に入っている作品 1 点の解説を記入させる。

■第3次：作品を鑑賞し合い、活動を ふり返る

完成した作品の鑑賞である。活動に際し、「紙コップの思い」がよく伝わってきた級友の作品を3点選び、作者名と選んだ理由をワークシートに書くように告げる。



食い入るように作品を見る

以下はワークシートに書かれた内容の一部である。

「悲しい」という思いがとても伝わってきました。理由は、目がたれていたり、目の色も悲しそうに青色にして表現していたので「真似したいな！」と思った作品でした。

級友の表し方の工夫を、形と色に着目して書いている。

鑑賞終了後、ワークシートに「ふり返り」を記入させ、本題材の学習を終えた。「ふり返り」では、3点の設問に対し、「とてもそうだ」「そうだ」「あまりそうではない」「そうではない」の4件法で回答させるとともに、本題材の感想を記入させた。

IV 児童の作品

- ① 紙コップの思い ② 作品名 ③ 説明



- ① かなしい。もう一度使ってほしい…。
- ② 「カラハーナ」
- ③ カラフルなお花ということです。カラフルにすることで怒っているイメージがわいてきたのでカラフルにしました。お花は水をあげないとしぼんでいく。その時の気持ちは悲しいということイメージしたのでお花にしました。



- ① もうごみ箱には入れないでほしい。
- ② 「ごみ箱に入れさせないぞモンスター」
- ③ 正面は入れられて悲しいのを表現したかったから、なみだを付けた。後ろは、ごみ箱を作って、それを約15本の手で押さえている。その下には、ごみを入れないように見ている目がある。



- ❶ し返ししてやる！
- ❷ 「ペーリアン」
- ❸ し返ししてやる！という気持ちだったのでペロを出した。少しうらんでいう気持ちもあったので目をつくり目にして、いかつい感じにしました。あと、角もはやして、しっぽもはやしました。本当はやさしい心を持っている感じにするために、ハートの形にしました。



- ❶ 30年も紙コップになるのを楽しみにしてたのに…
- ❷ 「なみだとまらない」
- ❸ なみだを手でおさえている様子。下の緑は紙コップになる前の木の様子。悲しくて泣いているから、「なみだとまらない」にした。



- ❶ くやしい。とてもムカムカする。
- ❷ 「ムカムカゴミ」
- ❸ 名前の由来は、怒っているように作ったから、「ムカムカゴミ」です。細かく切りきざんだのは、体についたゴミを表したものです。

V 授業後の感想

- ・ 想像力が試され、ものすごく楽しかった。環境問題を見直さねばと思った。
- ・ 紙コップ1つとシールで、こんなにいろいろな物が作れるとは思っていませんでした。
- ・ 学んだことは、紙コップは、ふだん使っていて、何も思っていないけど、自分がもしコップだったとしたら、とても悲しくて、「もう一度使ってよ…」という気持ちで捨てられてしまうので、とても自分でもいやな気持ちになってしまいます。このように、自分でふだん使っているものを捨てたりしてしまうと、コップがいやな気持ちになってしまうので、再利用することが大事だと思います。これからは、気をつけて、再利用できるものは、どんどんしていきたいと思っています。

- ・ 物は最後の最後まで使わないともったいないな、ということ学びました。みんなの作品を見てみたら、…〔略〕…物を大切にしないと、いつか自分もこういうモンスターにそうぐうしてしまうのではないかと思った。これからは、もっと大切にしたいと思いました。
- ・ 学んだことは、ふだんはゴミになっているものでも、いろいろな物に生まれ変わることができるということです。…〔略〕…だから、これからはゴミ箱に入れる前に一度手を止めてじっくりと考えてみたいと思いました。

VI 実践を終えて

児童は業間休みになっても活動が続けるほど、終始意欲的であった。授業後の「ふり返り」における設問「この題材は、やる気が出る楽しい題材でしたか」に対し、91.4%の児童が肯定的な回答をしている³⁾。授業後の感想からは、児童が本活動を楽しむ過程において、紙コップの造形素材として展開可能性や物の大切さを再確認したことが伺える。

以上から、本実践は造形教育、環境教育双方において一定の教育効果があった、と判断することができる。奏効の理由としては、次の3点が挙げられる。

1 点目は原実践である富川氏の実践のすばらしさである。巧妙な題材構成が児童の意欲的な活動を生起させ、紙コップの造形素材としての展開可能性への気付きを可能にした。材料を僅か2点に制限

³⁾ 内訳は「とてもそうだ」が65.7%、「そうだ」が25.7%であった。

することにより、レヴィ＝ストロース(1908-2009)⁴⁾の言う「野生の思考」⁵⁾が活性化されたと、考えられる。

2 点目はストーリー設定の変更である。原実践における「宇宙人の地球侵攻」という空想・外在的な問題を本実践では、ごみ問題という現実・内在的な問題に変えた。本設定が児童において「現実味のあるストーリー」として違和感なく受容されたことが感想から伺える。

3 点目は擬人化、すなわちアニミズム(animism)⁶⁾の視点から紙コップを取り扱ったことである。昨年度の実践⁷⁾同様、物を人間同様の心ある存在として眼差すことにより、児童において物の意味・価値の変容が生じた、と考えられる。改めて、環境教育の手法としての本アプローチの有効性を確認することができた。

尚、本実践では、製作の条件に「ごみを出さない」を加えた。環境教育を標榜する実践がごみを生むならば、それは意図せぬ結果、すなわち「隠れたカリキュラム」(The Hidden Curriculum)として機能する、と考えたからである。

今後も児童が活動を楽しむ過程において、効果的に機能する環境教育の題材開発と指導に努めたい。

⁴⁾ フランスの社会人類学者・民俗学者。

⁵⁾ 本来異なるカテゴリーに属するもの同士を独自の視点や理路により、大胆に「つなげる」「見立てる」「喩える」等する思考の様式。

⁶⁾ あらゆる生物・無生物、自然現象には靈魂(anima)が宿っており、人類はそれらと交流できると信じる世界観。

⁷⁾ 「うらめしや〜」(5年生)。食品ロスがテーマ。まだ食べられるのに捨てられた食品がお化けとなって現れた、という設定で食品のお化けを想像して絵に表す活動。